

おくれはせながら、新任の先生方を御紹介することにしましょう。今回は、みなさんからの意見を募集して、編集委員会で、苦肉の策と言うべく次の質問を設定し、それぞれ新任の先生方に答えていただきました。

氏名  
生年月日  
専攻  
尊敬する人物  
愛妻一口紹介  
趣味

- Q. 1 現在の分野を専攻された動機は何だったのでしょうか。  
Q. 2 総合科学部へ来られた動機は何だったのですか？  
Q. 3 清水先生、ヨーロッパ研究とは？  
久野先生、比較文化研究とはどんな学問？  
舟場先生、社会文化研究のめざしているものは？  
近藤先生、環境科学のめざしているものは？  
岩倉先生、総科生の外国語教育について一言…  
Q. 4 青春の悔いは？  
Q. 5 総科生に期待されることは？



清水 廣一郎

1935年4月2日生

専攻：中世末からルネサンス期の  
イタリア史

## スパゲッティ論議

イエール大学の R. S. Lopez 教授に「スパゲッティはだれが発明したか」という軽いエッセイがある。1940年に発表された L. White Jr. の論文 *Technology and Invention in the Middle Ages, Speculum*, XV 以来、スパゲッティの中国起源説が有力となり、イタリア大百科事典すらこれに傾いている。これは、自分にとって「胃への一撃」(ストレート・パンチ)にはかならない。自分は、人種法(反ユダヤ法)の時代にさまざまな屈辱を受けた——Lopez はイタリア系ユダヤ人で、大戦中にアメリカに亡命した——。しかし、その時でも自分は被害者だと感じる事ができた。しかし、スパゲッ

ティがイタリアの発明でないとすると、これはまさに重大である——。

このようにユーモラスな筆致でこのエッセイを書き始めた Lopez は、いくつかの史料をあげて、この問題に決着をつけようとする。そして、ついに一つの史料にめぐりあったことを明らかにする。それは、1284年2月13日付のピサの公証人文書である。これは、パン屋で働く徒弟の契約文書であるが、この徒弟は、vermicelli だけを作り、売る仕事をするという約束になっていた。ヴェルミチェッリという語は、北イタリアではごく細いスパゲッティを、南イタリアではスパゲッティ一般を指す言葉である。

しかも、その語源は verme(毛虫、かいこなど)であるから、これが細長い形をした食品であることは、中世に関してもまず疑いがない。ついであるが、スパゲッティの語源は spago(ひも)である。ところで、Lopez は、これを1244年のジェノヴァの一文書と関連させようとする。この文書には、スパゲッティでもヴェルミチェッリでもないが、現在のイタリア語でめん類の総称である pasta という言葉がでてくる。Lopez は、この二つの証拠を組み合わせることによって、イタリアには、すでに1244年にスパゲッティ式のめん類が存在した事を主張するのである。この点の論証はいささか苦しいといわねばならないが、Lopez がその無理をあえておかすのは、1244年という年号を重視するからなのである。つまり、ヨーロッパからモンゴルに送られた最初の使節 fra Giovanni del Pian del Carpine がローマを出発したのが1245年、帰国したのが47年だったのである。また、有名なマルコ・ポーロの父が東方へ出発したのは、それより15年も遅れている。要するに、Lopez によれば、西ヨーロッパ人のモンゴル到達以前から、イタリアにスパゲッティが存在したことになる訳である。

Lopez は「イタリアの名誉は救われた」というユーモラスな表現でこのエッセイを終えているが、問題はそのように単純ではない。すでに触れた論証上の難点は別にしても、文化交渉、それも食品のような生活文化そのものの交渉が、マルコ・ポーロのような特定の人間の活動によってのみ行なわれるとするのは、大きな独断であろう。マルコ・ポーロは、モンゴルの体系的な交通網を利用することによって、

旅行し得たのである。つまり、文化の恒常的交流はヨーロッパ人がそれに積極的に関与したかどうかに関わりなく、つねに行なわれていた。Lopez の示した証拠は、むしろ両刃の剣なのである。

さて、ここで学生側編集委員からのアンケートに答えるべき所であるが、このような形式は、なかなか答えにくい。そこで、簡単に要点を記すことにしたいと思う。私は、1935年東京の生まれ。東京外国語大学でイタリア語を、続いて一橋大学でヨーロッパ経済史を学んだ。前任校は東京教育大学。専攻は、中世末からルネサンス期のイタリア史という事になる。なぜこのテーマを選んだかという質問に簡単に答えるのは難しい。関心のある方は、まず私の著書なり論文なりを読んでみて戴きたいと願っています。ところで、現在のヨーロッパ史研究は、大きな転換期にあるといえるだろう。ヨーロッパ史の中に「近代化」の基準=手本を求めるというかつての研究の枠組は、皮肉にも高度成長と環境汚染の深刻化の中で、大きくゆらいでしまった。新たなヨーロッパ像を求めて、さまざまな方法が模索されているというのが現状だろう。私は、イタリアという従来のヨーロッパ史の「辺境」からこの問題についてのささやかな光をあててみたいと思っている。本学部での私の研究も、また講義も、もっぱらこの問題に関わることになるだろう。



## 久野 昭

1930年1月8日生

1952年京都大学文学部哲学科哲学専攻卒



- A. 1 何故、そんなことを訊くのですか？ 何故でも選んだのです。
- A. 2 選択の動機は単一なものではありません。強いてひとつの動機を挙げれば、新しい研究領域である比較文化研究の講座を、この領域での最高水準のものたらしめるためです。どんな研究をするつもりかについては、研究成果でお答えするつもりです。
- A. 3 どんな文化についても、その文化なりの土着性と普遍性があるはずですが。それぞれの精神的伝統や風土的条件のなかで形成された互いに異質の文化を比較することを通じて、人間にとって文化のもつ普遍的な意味を明らかにしなければなりません。ただし、この普遍性は土着性と切りはなしがたく結びつくはずですし、比較と言っても、たんに右と左を対照させてみるだけではすみません。くらべることは、いわば、くりあわせることであり、くりあわせていく主体的な操作が、比較では大きな意味をもつはずですが。人間にとって文化のもつ普遍的な意味もまた、この操作と絡みあってくると思います。
- A. 4 この類の質問は苦手ですので、代りに、森田公一とトップギャランの「青春時代」でもお聞きください。
- A. 5 総合科学的な展望に迫れるだけの懐疑心と知的好奇心を望みたいと思います。

以上が、与えられた質問に対する答である。解答が終わったら、あとは自由に書けということなので、自由に書く。ほんとに自由に書くのだから、教訓など期待しないでいただきたい。

裏日本は福井の地のある邑に生まれ、いまは都に住まう国文学者Y君が、昭和の代の三十八年に円盤の天翔けり行くを見た。彼が真剣に語った言によれば、その年の五月、心もちいて窮なく知識を求め

んと深更に到るまで坐して書を読んでいたところ、斗鶏三時を告ぐるを聞いて幕屋より庭先に立ち出でて、雲なく星辰輝ける天空にむかって身を伸ばした瞬間、視よ、地と天の間を右より左に響きなく滑る如くに飛ぶ形象あって、下より上稍小さき二段の円盤より成って、ビール色に光輝いていたそうだが、この異象曳かれるが如くに一分間にて虚空に姿を消したのである。酔ってたんじゃないの、との質問に憤然としてY君答えて、素面であった。人の子よ、悪しき靈の我眼を欺きし故と疑うて思うなかれ。

このY君、福井の巫女に頼んで紫式部の靈を喚んでもらったことがある。靈降って語るには、源氏物語の主題は美しさと悲しみとなり。その源氏物語は六十帖ありて、六十帖目は、きよみと題す。浄みなり。しかも、この帖、現存す。福島県某郡某村、二十軒がほどの村なるが、その旧家に蔵されてあり。この村は炭焼きにて生活を立てている村落だが、その村の長の家の床の間に、紫のふくさに包まれて、盆に載せてあるのが、源氏物語第六十帖きよみ。ということも靈が告げたのだそう。Y君、ただちに福島県のその某村の村長あての電報を頼むや、汽車に飛びのって駆けつけた。着いたのはいいが、その某村、いまは存在しない。なぜ地図を調べなかったかと、後に、主任教授が叱言を言った。そういう前歴があるから、空飛ぶ円盤の件もいささか眉唾であるが、その円盤ビール色に輝いていたというくだりが、なんとも秀逸である。ついでだが、その話が出たおり、Y君とわたくしと、あるビルの屋上のピヤガーデンで初秋の風に涼をとっていた。はや、ひと昔以上も前のことである。

## 舟場 正 富



昭和13年2月20日生

専攻：財政学，地方財政論，地域開発論。京都大学文学部史学科卒。（学位 文学修士，経済学修士，経済学博士）

尊敬する人物：なし（但し，神をも怖れない不逞の輩であることを自覚して，それを恥じております。）

愛妻一口紹介：私のすることの跡始末をしてもらうのに適任と思っていましたが，時には敢然と反抗します。晩生の自我の目覚めかと思っている次第です。

趣味：釣りや登山が好きですが，最近機会に恵まれません。その他，絵画，音楽，古寺めぐりなど。

- A. 1 私はもともと人文地理を勉強し，地域の歴史や生活実態の解明に興味をもって，野山や街を登山靴で歩きまわっていました。農家の人たちと暮らしの問題を一緒に語り，宮沢賢治の世界に憧れたものでした。

大阪近郊の灌漑調査を進めていたころ，新幹線の車庫用地の買収があり，親しくしていた精農家のおかみさんが，「うちの田圃はもう少しのところで買収にならず，惜しいことでした」とつぶやくのに直面し，自分の夢の甘さを痛感したのです。

そのあとは一直線に，経済政策の勉強を進めて15年になります。テーマは，その時々々の社会的課題を反映して変わってきました。国債発行にゆれ動いた昭和41年春からは，「イギリス公信用史の研究」にとりくみ，未来社から出版，国家財政の乱れがどんなに国民生活に迷惑をかけるかを訴えました。公害問題には昭和30年代末から関心を寄せ，また同じ頃から地方財政論にもとりくんでいます。これも「現代日本の地方財政」として新評論から出版し，その他の著作でもこれらに関するテーマを理論的・実践的に継続させているところです。

- A. 2 大学改革の旗手として，日本全体に与える影響が大きいと判断したからです。これからの研究は，当然これまでの研究の延長上にあります。次の新しい課題として発展途上の地域開発論を考え，少しずつその芽をはぐくんでいます。いずれはグローバルな地域開発論を構築してみたいと，ひそかに楽しんでいます。（私は研究テーマをラディカルに変えるくせがありますが，その時には必ずこれ

までの研究を一冊の本にまとめること，新しいテーマについては3～5年間程度モチーフをあたため，関心と準備を併行的に進めることをモットーとしたいと希っており，幸いにもこれまでのところはそのようになっています。

- A. 3 社会文化研究に限らず，総合科学部全体として研究の国際性と現実性を推進していくべきです。「悩めるパイオニア」ではなく「はばたくパイオニア」になるべきです。

- A. 4 失礼ない方も知れませんが，この設問は愚問だと思います。人は一生青春時代を送りたいものなのです。

- A. 5 私の指導はきびしいかも知れませんが，やる気を見せてついてきてくれる学生諸君にはすべてを傾注します。学生諸君も，教官がへきえきする程の勉強を進め，大いに困らせて下さい。

- A. x 最後に一言。近ごろ私の行動半径が広がり，時には海外にまで足をのばすことがあります。最近の心境の一つに「土地に惚れる」という表現があります。ここでの「土地」という意味は，歴史や生活をたっぷりふくんだ *Landschafts* です。私は広島も，京都も，それから外国人には悪評高いジャカルタさえも好きです。ただ，おべっかをつかうひまがないし，誤解された時それを弁明することにもあまり興味がないのです。



## 近藤 勝彦

昭和19年5月5日生

専攻：植物学（ノースカロライナ州立大学植物学科、修士、博士）

趣味：釣、レコード音楽鑑賞。

尊敬する人物：A.J. シャープ博士（テネシー大学名誉教授、前米国植物学会会長）。

愛妻一口紹介：私のワイフは子供が生まれるまで大学で英文学の教職についていたので、私の現在の仕事および環境に対して十分な理解をもっている。

A 1. 父に影響をうけた。父は趣味的ではあるが植物に起るさまざまな現象を観察しては楽しんできたので、植物を通して中学校から大学までの植物関係の先生に友人が多く、自然とその人々に植物についての話を伺う機会が多かった。その父にある時来日中のシャープ博士が紹介され、話題は私の将来についてとなり、シャープ博士は私の米国留学と植物学の専攻を勧めた。これが私が植物学を専門として選んだ理由である。

A 2. 7年間米国に滞在し、修士と博士の学位を得て帰国し、広島大学理学部植物学教室で研究しながらメリーランド州立大学で環境保護学と生物学を教えていた私の目に、真新しい米国の大学教育システムを参考にした総合科学部での仕事の“公募”という字がとまった。このユニークな学部で仕事をすれば、私なりに時間と青春をかけて米国で得てきた植物学を中心とした生物学が大いに学部環境に適合して、私自身まだ得られていない未知の知識を様々な方面の先生方から吸収して、さらに大きな成長をとげることができるであろうと感じて応募した。

私は欲張りで色々な方面に興味があるが、まず最初に手がけていることは、自然環境下および人為的環境下における物理的、化学的およびその他、諸条件を動植物細胞に与えてその影響を細胞および染色体レベルで研究し、細胞毒理学の分野の開発をめざしている。

A 3. 私は青二才でこの問題に答えるだけの十分な視野をまだ持ちあわせていませんが、私個人としては現時点で次のように考えています。近代社会と生活がもたらしているひずみ、調和ある地球上の環境の破壊と多くの難問題をかかえるようになった今日の環境諸問題を、様々な研究部門の人々が一体となってアカデミックな立場で、いままでの研究方法を使うばかりでなく、さらに新しい方法を開発して、色々な角度から現代環境問題に対処できうる環境科学とい

う学問の大系、方向と位置づけをめざしているのだと思います。

A 4. 私はいままで他の多くの研究者がそうであるように個人を中心にした仕事と生活をしてきました。従って青春時代にクラブに入部などしてなにかグループ活動をし、多くの仲間とさわいでみたかった。

A 5. 私個人、多くの研究室を歩いてきただけに、研究室のカラーには大変敏感だし、また第三者的立場として客観的に観察してき、研究室の歴史など聞くにつれ、なにごととも最初が肝心であるように学部、研究室のカラーは、最初の数年で決まるように思われます。こう考えると現在学部で教えられている先生方は当然、学んでいる学生諸君、そしてこれから数年の間に本学部で学ぶ学生諸君の大きな影響によって本学部のカラー、そして研究室のカラーができて上がっていくものと思っています。これからの先輩として本学部をもりあげ、先生方と努力、協力しあって高いレベルのカラーをつくりあげていって欲しいものです。一度でき上がった軌道を歩みはじめるのと修正ができにくいからです。

### A x 総合科学部にきて考えること

日本の野草で秋の七草に含まれるほどの庶民的な植物の1つにクズがある。私はこのクズの米国での歴史を調べてみたことがある。約100年ほど前フロリダ州チプレイという町にプリースという農夫が日本よりブドウ苗ということでクズの苗を入手し、栽培を始めた。この植物は彼の庭で繁殖に繁殖を重ね、増えすぎたので彼はつるを切ってはごみ捨て場に捨てた。捨てられたつるは根をだし活着し、周囲に広がり始めた。そのクズをウシが好んで食べている様子を彼がみて、驚き喜びさっそくクズのつるをたくさん切り取り友人に分け与えてウシのよい餌として役立つと宣伝した。つるを受け取った1人に農務省土壤管理局に勤めるポール・ターバーという研究者が

いた。彼は自分なりにこの植物の特徴を調査し、栽培試験を重ねた結果、土堤の雨による土砂の崩れをよく防ぐ役目をすることを発見した。研究報告書をまとめて、米国南部を中心にクズの苗が配付され、植えられた。これが原因で、今では南部を中心に各地で植生を破壊し、地上に置かれた何物も飲み込んで、ガソリンをかけて焼いても、除草剤を散布しても全滅しない怪物に育ってしまった。この風景は米国南部を旅行された方ならばだれも見えて知っておられるでしょう。現在83才のポール・ターバー氏はクズについて、「クズは米国南部に第一次世界大戦から第二次世界大戦の間に私によって普及された。当時南部農民は貧しく、ワタはポール・ウィーブルという昆虫に荒されるし、畑は洪水で駄目になることが多かった。その時我々は土堤の土砂崩れを防ぎ、しかも牛の餌になるというクズをさかんに推奨し各方面に植えて、その当時は成功して人々に喜ばれたものの1つであった」と残念げにつぶやいた。現在のクズの脅威について、当時何人の人が予言できたであろう。このクズの恐ろしさが解明され始めたのは手のつけられぬ有様になってしまった1950年代に入ってからのことである。

現在の複雑多様化した我々の社会生活の中で最も慎重に考えねばならぬことは、環境問題に対する我々とくに科学者といわれる人々、応用、技術関係で仕事をされている人々の態度であると思います。細く自分の専門分野だけでデータを集め処理し、現時点だけの特定の領域でのみ効果と利益を求めからクズのような例が出てくるのだと思われる。科学的方法と成果とは異なるものだという事を理解せねばなりません。科学者は新データ、これに基づく新しい考え、そしてそれらの人間社会への応用を求めればかりが能ではない。これら新しい素材をよりどころにして、よりよい新知識と我々の環境とを結びつけ、我々のいる位置づけをはっきりとさせる必要があるように思う。私は植物学を専攻としますが、細い専門分野におぼれることなく、得られた現象を生物学の中、我々の社会の中でどのようにとらえてゆくことができるかを様々な角度から考え、幅の広い知識と考え方を追求し、この点ではいつまでも学生のつもりで学んでゆく必要があると痛感する。この点学際的な研究教育組織である本学部の成長に大きな期待をもち、多くの先生方から広い知識と考え方を学びとってゆきたいと思っている。

### 岩 倉 国 浩

昭和17年4月8日生

専攻：アメリカの言語学、特に変形生成文法理論  
(ミシガン州立大学、言語学科博士課程)

私の尊敬する人物：アメリカの言語学者ノーム・チョムスキー

愛妻一口紹介：英文タイプが特技の熱烈なカープファン

趣味：読書、卓球、連珠、ランニング

- A 1. 英語を含めて、言語を科学的に分析することに強く興味を覚えたから。
- A 2. 学際的研究を重視し、総合的研究を推進、発展させようという総合科学部の将来性に期待したから。私の専門はアメリカの言語学、特に変形生成文法理論であり、現代アメリカ英語を素材にして理論的研究を深めていきたいと思うが、併せて、この理論が日本語にもどの位適用可能かという観点から考えていきたい。
- A 3. 一般英語の中に英会話、英作文、LL演習の授業が含まれていて、工夫がなされていると思う。しかし、まだ改善の余地が残されており、どのよ

- うに改善していくかは今後の課題である。
- A 4. 特に悔いはなし。
- A 5. 外国語能力はその人の知的水準のパラメーターの一つであると言っても過言ではないと思う。ミシガン州立大学留学中に心理学を専攻している大学院の学生から聞いた話であるが、ある実験データによると数学の問題を解く能力と外国語の能力とが高い相関関係を示したそうである。すなわち、数学のよくできる学生は外国語の能力が高く、外国語のよくできる学生は数学の能力が高かったという。そこで総合科学部の学生諸君に望みたいことは、専攻分野が理科系、文科系を問わず、外

国語能力をしっかり身につけて欲しいということである。外国語の能力とは言うまでもなく、外国語を読み、書き、聞き、話す総合的能力のことである。私はしっかりした外国語能力は、あらゆる高度の学問研究の基礎となるものであると思っている。

A x 昨年10月に本学部に赴任してきて現在まで最も良かったことの一つは、同じく昨年の10月にフルブライターとしてニューヨーク市立大学からお見えになったDr. Richard Gid Powers と友人になれたことであった。彼との10カ月足らずの



Dr. powers と富士山頂にて(昭52.7.9)

つき合いの中で最も大きなでき事は、帰国直前に果たした富士登山である。7月8日に広島を出発し、その日は富士山麓にある富士宮市の旅館に泊まった。夜中にやぶ蚊に悩まされて彼も私も十分な睡眠がとれなかったが、それでも翌朝6時に起床して、意気揚々と朝一番のバスに乗りこんだ。新五合目に着いたのは8時半で、ここですでに2,400mの高さがあり、富士山頂は雲間からすぐそこに見えた。30分程、高地に体を慣らしてから9時にいよいよ登山を開始した。富士宮を出る時は曇っていたが、登るにつれて青空が見え始め、六合目あたりからすっかり雲の上に出た。頭上に目にしみるような青空、眼下に雲海の広がる様はまさに壮観の一語につきた。七合目あたりが一番しんどくて、これではとても登頂は無理かと心配されたが、登るにつれて“second wind”を得て、次第に調子が上がり、結局、4時間半で登頂に成功した。同じバスで来た40人程の登山者達の中で(彼らはいずれも私達より若く、元気そうであったが)、何と私達が一番乗りであった。実は富士登山決行の一週間前、彼と私は予行演習のため、白木山を征服(?)して2人とも自分の体力に自信をつけておいたことがよかったのだと思う。無事富士登山できたことを誇りに、又、よい思い出としてDr. Powers は家族と共に7月14日に日本を去って、帰国の途についた。いつの日か再会できる日が訪れることを祈って、この一文の結びとしたい。

